

## 謝罪についての被害者の認知

－加害者の謝罪に関する情報と被害者のパーソナリティに着目して－

芝崎美和<sup>1)</sup>\*・芝崎良典<sup>2)</sup>

1) 新見公立大学健康科学部健康保育学科 2) 四国大学

(2021年9月22日受付、11月17日受理)

本研究の目的は、実体信念と特性寛容性という2つのパーソナリティと、過去と現在の謝罪情報によって、加害者の謝罪についての被害者の認知が異なるかを明らかにすることであった。青年期女子94名を対象に質問紙調査を実施した。分析の結果、加害者の印象形成、怒り緩和、罪悪感、許容、再犯抑制と類似場面での謝罪の予測といったすべての項目について、謝罪情報との関連性が確認された。一方、実体信念と特性寛容性といったパーソナリティ要因との関連性が確認されたのは、ポジティブ印象形成と許容のみであった。したがって、謝罪の効果には、加害者の持つ過去と現在の謝罪情報が強く関係するが、加害者に対するポジティブな印象形成と許容の程度には、被害者自身の特性が関係することが示された。

(キーワード) 謝罪、実体信念、特性寛容性、情報処理

### 問題と目的

謝罪には、加害者に対する怒りを緩和し、許容を引き出す効果がある<sup>1) 2)</sup>。謝罪した加害者は、違反に対する責任を受容していると認識され、良い印象が形成されやすい<sup>1)</sup>。また、喪失した信頼が回復され、罰が回避されるなど<sup>4)</sup>、謝罪には、社会的アイデンティティの回復や社会的受容といった効果が期待される<sup>1) 3)</sup>。

特に、加害者の印象に注目し、児童期を対象に検討したDarby & Schlenker<sup>3)</sup>は、他人に親切でトラブルをあまり起こさないといった良い評判の持ち主は、正反対の悪い評判の持ち主に比べ、違反によるダメージを最小限にとどめることができることを明らかにした。つまり、良い評判の持ち主が引き起こした違反は意図的ではなく偶発的に生じたものであり、また、彼らは自責の念を認識しているとみなされたのである。さらに、より年齢の高い児童になると、良い評判を持ち、かつ自責の念を抱く加害者は、罰を避けるための謝罪をしないと判断していた。このように、加害者の既存の印象は、加害者についての被害者もしくは第3者による認識に強く影響するといえるが、一方で、加害者の既存の評判が良く、かつ彼らが自責の念を抱いているときに、謝罪の効果は最大になるというDarby & Schlenker<sup>3)</sup>の仮説は証明されなかった。Darby & Schlenker<sup>3)</sup>は、この結果について、謝罪は、加害者の社会的立場を半ば自動的に保証する行為であり、それは、謝罪－許容スクリプトといった観点から説明することができるとしている。謝罪－許容スクリプトとは、違反を犯した

加害者は謝罪すべきであり、謝罪を受けた被害者は加害者を許容すべきであるという、謝罪と許容についての認知的枠組み(知識構造)のことを指す<sup>3)</sup>。すなわち、加害者には、謝罪－許容スクリプトに基づき、評判の良悪にかかわらず、一様の利益が与えられたのではないかというのである。

Darby & Schlenker<sup>3)</sup>は、加害者の評判として、他人に親切でトラブルを起こしそうでないといった対人葛藤に関連する内容を扱った。しかし、被害者や第3者が加害者の謝罪を評価するとき、考慮するのは、対人葛藤に関する加害者の情報というよりは、むしろ、加害者の謝罪に関する情報ではなからうか。つまり、加害者が過去および現在の対人葛藤場面においてどの程度謝罪したかといった謝罪情報によって、謝罪がもたらす効果の程度が異なる可能性が高い。

この点について、芝崎・芝崎<sup>5)</sup>は、過去の謝罪と現在の謝罪という2つの謝罪情報の処理という観点から検討した。その結果、過去に謝罪したか否かによらず、現在謝罪した加害者の方が、怒り緩和、許容、ポジティブな印象形成といった謝罪の恩恵をより多く受けること、また再犯が予測されにくく、反対に類似場面での謝罪が予測されやすいことが明らかになった。さらに、直前の違反場面と同じように謝罪したとしても、過去に謝罪しなかった加害者よりも謝罪した加害者の方が、類似場面で謝罪すると強く予測されることも明らかになった。これらの結果は、被害者や第3者は、加害者の謝罪を評価する際、現在の謝罪情報を優先的に処理していること、謝罪による恩恵は加害者に一

\*連絡先: 芝崎美和 新見公立大学健康科学部健康保育学科 718-8585 新見市西方1263-2

様にもたらされるのではなく、現在と過去の謝罪情報によって効果の程度が異なることを意味している。

### 実体信念と謝罪との関係

被害者や第3者の立場から、加害者の謝罪を評価する際、加害者の謝罪情報以外に、評価に影響する別の要因として、被害者の特性があげられる。中でも、謝罪受容や許容に注目したとき、影響因の1つとして実体信念があげられる。実体信念 (entity belief) とは、「能力や特性は変わらず固定的である」というもので、「能力や特性は変わりうる」という増加信念 (incremental belief) とは対極にある<sup>6)</sup>。実体信念では、問題解決の有無は固定的な能力に規定されており、したがって、努力の有無によらず、解決できない問題は解決できないままである<sup>7)</sup>。他方、増加信念では、能力は努力によって変化すると捉えられているため、一度の失敗が次の失敗に繋がるとは限らない<sup>7)</sup>。このような信念は、加害者の謝罪の評価にも影響する可能性が高い。

実際に、実体信念が謝罪後の許容にどのように影響するかを検討した大淵・山本・謝<sup>8)</sup>は、加害者が謝罪した場合、実体信念の強い人よりも弱い人の方が加害者を許容する程度が高いことを明らかにした。このことは、「特性は変わらない」という実体信念の弱い者ほど、違反事実を認めて謝罪した加害者を、行動改善の期待から許すことを意味している。

このように、加害者の謝罪の評価には、実体信念という被害者のパーソナリティが強く影響し、謝罪が加害者に一律の効果をもたらすとはいえない。では、各信念を持つ被害者が加害者の謝罪を評価する際に、どのような意志決定プロセスが生じているのであろうか。本研究では、この点について、過去の謝罪と現在の謝罪という2つの謝罪情報の処理という観点から検討したい。

### 本研究の目的

本研究では、被害者のパーソナリティと加害者の謝罪情報が謝罪効果とどのように関連するかについて検討を行う。被害者のパーソナリティに関しては、大淵ら<sup>8)</sup>に倣い、実体信念と特性寛容性を取り上げる。実体信念に関しては、謝罪受容と負の関係性にあることが確認されている<sup>8)</sup>。反対に、特性寛容性については、謝罪受容の高さとの関連性が明らかにされており<sup>9)</sup>、寛容性の高い者ほど謝罪した加害者を許容しやすいという。本研究では、過去の謝罪と現在の謝罪という、加害者の持つ2つの謝罪情報と加害者の謝罪についての被害者の認識との関連性の程度が、これら2つの信念にいかに関与されるかについて検討を行う。なお、複数の情報を統合する能力は男性よりも女性の

方が高いことから<sup>10)</sup>、本研究では成人女性を対象とした検討を行うこととする。

本研究の仮説は以下の通りである。芝崎・芝崎<sup>5)</sup>によると、過去に謝罪したか否かによらず、現在謝罪した加害者の方が、謝罪の恩恵を多く受けている。したがって、2つの謝罪情報のうち、現在の謝罪情報の優先度が高く、その傾向は、友好的方略を好む特性寛容性の高い者の方が強いであろう (仮説1)。反対に、努力で人の特性や能力は変わらないという認識<sup>6)</sup>を持つ特性信念の強い者は、過去の謝罪情報に注目すると考えられるため、過去の謝罪情報の優先度が高いであろう (仮説2)。

### 方法

**対象者** 調査対象者は女子大学生94名であった。

**手続き** 質問紙による一斉調査を行った。質問紙は、謝罪課題と実体信念および特性寛容性の尺度で構成されている。

#### 1) 謝罪課題

調査対象者1名につき、4課題 (謝罪なし過去情報-謝罪あり現在情報 (以下、謝罪なし-謝罪あり)、謝罪なし過去情報-謝罪なし現在情報 (以下、謝罪なし-謝罪なし)、謝罪あり過去情報-謝罪なし現在情報 (以下、謝罪あり-謝罪なし)、謝罪あり過去情報-謝罪あり現在情報 (以下、謝罪あり-謝罪あり)) を提示した。課題提示順序については、調査対象者ごとにカウンターバランスをとった。

課題文、教示文、質問文は以下の通りである。なお、課題文および質問文は、芝崎・芝崎<sup>5)</sup>と同様のものである。課題文

謝罪なし-謝罪あり条件: 「ユカさんは、あなたに対して、何か悪いことをしたとしても、一度も謝ったことがありません。ある日、あなたはユカさんと遊ぶ約束をしていました。しかし、ユカさんは、約束の時間に遅れてやってきました。ユカさんは、これまで一度も謝ったことがなかったのですが、今日もあなたに謝りませんでした。」

謝罪なし-謝罪なし条件: 「マミさんは、あなたに対して、何か悪いことをしたとしても、一度も謝ったことがありません。ある日、あなたはマミさんと遊ぶ約束をしていました。しかし、マミさんは、約束の時間に遅れてやってきました。マミさんは、これまで一度も謝ったことがなかったのに、遅れてしまっでごめんなさい。」とあなたに謝りました。」

謝罪あり-謝罪なし条件: 「コトミさんは、あなたに対して、何か悪いことをしたとき、必ず謝ります。ある日、あなたはコトミさんと遊ぶ約束をしていました。しかし、コトミさんは、約束の時間に遅れ

てやってきました。いつもは謝るのに、今日は謝りませんでした。」

謝罪あり－謝罪あり条件：「ミホさんは、あなたに対して、何か悪いことをしたとき、必ず謝ります。ある日、あなたはミホさんと遊ぶ約束をしていました。しかし、ミホさんは、約束の時間に遅れてやってきました。ミホさんは、いつものように今日も、「遅れてごめんなさい。」とあなたに謝りました。」

課題文を提示した後、(a) ポジティブ印象（あなたは、コトミさんに対して、どの程度ポジティブな印象を持ちましたか。）、(b) ネガティブ印象（あなたは、コトミさんに対して、どの程度ネガティブな印象を持ちましたか。）を7段階評定（まったくポジティブ/ネガティブな印象を持たない（1点）～非常にポジティブ/ネガティブな印象を持つ（7点））で求め、ポジティブ印象得点とネガティブ印象得点を算出した。続いて、(c) 怒り（あなたは、コトミさんにどの程度怒っていますか？）について7段階評定（まったく怒っていない（1点）～非常に怒っている（7点））で求め、得点を逆転させたものを怒り緩和得点とした。さらに、(d) 罪悪感予測（あなたはコトミさんが罪悪感を持っていると思いますか？）、(e) 許容（あなたはコトミさんのことを許そうと思っていますか？）、(f) 再犯予測（コトミさんは、次に遊ぶと時、遅刻すると思いますか？）、(g) 謝罪予測（次に遅刻したとき、コトミさんはあなたに謝ると思いますか？）を7段階評定（まったく思わない（1点）～非常に思う（7点））で求め、罪悪感予測得点、許容得点、謝罪予測得点を算出した。(f) 再犯予測については、得点を逆転させ、再犯抑制得点とした。

## 2) パーソナリティ尺度

大淵・山本・謝<sup>8)</sup>は、実体信念と特定寛容性を測るものとして、それぞれChiu, Hong, & Dweck<sup>11)</sup>が示す3項目とBrown<sup>9)</sup>の示す4項目を翻訳したものをを用いている。本研究では、大淵<sup>8)</sup>の実体信念尺度と特性寛容性尺度を採用し、それぞれ6段階（まったくそう思わない（1点）～強くそう思う（6点））で回答するよう求めた。

**倫理的配慮** 調査は一斉方式で実施された。調査にあたり、回答は任意であること、回答したくない項目には回答しなくてよいこと、成績とは無関係であること、無記名調査であるため個人の回答は開示されず、特定されないことを調査紙面で記載説明するとともに、口頭で説明した。質問紙への回答をもって、本研究への協力の許諾と判断した。なお、本研究は第2著者の所属機関における倫理審査機関において承認が得られている（承認番号2020026）。

## 結果

### 1. 実体信念と特性寛容性に基づく群への分類

実体信念尺度と特性寛容性尺度における回答から、実体信念得点と特性寛容性得点を算出し、各得点の平均値に基づき調査対象者を4群（実体信念低－特性寛容性低（以下、LL群）、実体信念低－特性寛容性高（以下、LH群）、実体信念高－特性寛容性低（以下、HL群）、実体信念高－特性寛容性高（以下、HH群））に分類した。LL群には19名、LH群には16名、HL群には31名、HH群には28名が振り分けられた。各群の平均値および標準偏差はTable 1に示すとおりである。

Table1. 各群の平均値と標準偏差

	実体信念		特性寛容性	
	平均値	標準偏差	平均値	標準偏差
LL群 (n=19)	3.84	.58	2.84	.71
LH群 (n=16)	3.79	.79	4.28	.60
HL群 (n=31)	5.67	.47	2.85	.53
HH群 (n=28)	5.68	.54	4.63	.71

### 2. パーソナリティ特性と謝罪情報が印象に及ぼす影響

特性群と謝罪情報によって、2つの印象得点が異なるか否かについて、群（4：LL群、LH群、HL群、HH群）×謝罪情報（4：謝罪なし－謝罪あり、謝罪なし－謝罪なし、謝罪あり－謝罪なし、謝罪あり－謝罪あり）の2要因の分散分析を実施した。その結果、ポジティブ印象得点に関しては、謝罪情報の主効果が有意であり（ $F(3, 270) = 257.47, p < .01$ ）、群の主効果にも有意傾向が見られた（ $F(3, 270) = 2.46, .05 < p < .10$ ）。ボンフェローニ法による多重比較を行ったところ、謝罪なし－謝罪なし条件、謝罪あり－謝罪なし条件、謝罪なし－謝罪あり条件、謝罪あり－謝罪あり条件の順に得点が高く、また、HL群よりもHH群の得点が高い傾向がみられた。

ネガティブ印象得点に関しては、条件の主効果が有意であり（ $F(3, 270) = 166.71, p < .01$ ）、ボンフェローニ法による多重比較を行ったところ、謝罪あり－謝罪あり条件よりも謝罪なし－謝罪あり条件と謝罪あり－謝罪なし条件の得点が高く、また、謝罪なし－謝罪あり条件と謝罪あり－謝罪なし条件よりも謝罪なし－謝罪なし条件の得点が高い傾向がみられた。

### 3. 謝罪情報と謝罪効果の関連性

怒り緩和得点、罪悪感予測得点、許容得点と特性群および謝罪情報との関連性を明らかにするために、群（4：LL群、LH群、HL群、HH群）×謝罪情報（4：謝罪なし－謝罪あり、謝罪なし－謝罪なし、謝罪あり－謝罪なし、謝罪あり－謝罪あり）の2要因の分散分析を行った。

怒り緩和得点については、条件の主効果が有意であり（ $F(3, 270) = 124.70, p < .01$ ）、ボンフェローニ法を用



Table2. 各項目における平均値と分散分析結果

		謝罪なし－ 謝罪あり条件	謝罪なし－ 謝罪なし条件	謝罪あり－ 謝罪なし条件	謝罪あり－ 謝罪あり条件	F 値		
						パーソナリ ティ群	謝罪情報	交互作用
1. ポジティブ印象得点	LL群	5.16	1.58	3.32	5.79	2.46+	257.47**	n.s.
	LH群	5.19	1.63	3.44	5.56			
	HL群	4.41	1.52	3.13	5.68			
	HH群	5.39	1.46	3.61	6.18			
2. ネガティブ印象得点	LL群	4.05	6.26	4.63	2.21	n.s.	166.71**	n.s.
	LH群	4.06	6.19	4.31	2.56			
	HL群	4.52	6.32	4.87	2.48			
	HH群	4.57	6.50	4.61	2.03			
3. 怒り緩和得点	LL群	3.84	2.32	4.16	5.79	n.s.	124.70**	n.s.
	LH群	3.94	2.56	4.50	5.63			
	HL群	4.32	2.61	3.97	5.58			
	HH群	4.21	2.29	3.86	5.96			
4. 罪悪感予測得点	LL群	4.74	1.89	3.58	6.26	n.s.	202.31**	n.s.
	LH群	4.56	1.75	3.75	6.00			
	HL群	4.35	1.55	3.42	5.90			
	HH群	5.04	1.54	3.25	6.14			
5. 許容得点	LL群	5.32	2.74	4.63	6.37	n.s.	168.05**	1.83+
	LH群	5.06	3.19	5.25	6.19			
	HL群	5.13	2.45	4.55	5.97			
	HH群	5.57	2.36	4.14	6.29			
6. 再犯予測得点	LL群	3.47	2.11	4.74	5.63	n.s.	127.96**	n.s.
	LH群	3.69	2.31	4.69	5.50			
	HL群	3.35	1.74	4.52	5.39			
	HH群	3.82	2.04	4.07	5.64			
7. 謝罪予測得点	LL群	4.21	1.74	4.58	6.53	n.s.	319.96**	n.s.
	LH群	4.56	1.88	4.94	6.38			
	HL群	4.23	1.52	4.45	6.48			
	HH群	4.50	1.43	4.07	6.68			

.05 < \* $p$  < .10, \*\* $p$  < .01, \*\*\* $p$  < .01

いた多重比較の結果、謝罪なし－謝罪なし条件よりも謝罪なし－謝罪あり条件と謝罪あり－謝罪なし条件の得点が有意に高く、次いで謝罪あり－謝罪あり条件の得点が有意に高かった。

罪悪感得点に関しては、条件の主効果が有意であり ( $F(3, 270) = 202.31, p < .01$ )、謝罪なし－謝罪なし条件、謝罪あり－謝罪なし条件、謝罪なし－謝罪あり条件、謝罪あり－謝罪あり条件の順で得点が有意に高いことが明らかになった。

許容得点については、条件の主効果が有意であり ( $F(3, 270) = 168.05, p < .01$ )、また、特性群×条件の交互作用に有意傾向が見られた ( $F(9, 270) = 1.83, .05 < p < .10$ )。ボンフェローニ法による多重比較を行ったところ、LL群とHL群では、謝罪なし－謝罪なし条件よりも謝罪なし－謝罪あり条件の得点が高く、また、謝罪なし－謝罪なし条件、謝罪あり－謝罪なし条件、謝罪あり－謝罪あり条件の順で得点が高かった。LH群では、謝罪なし－謝罪なし条件の得点が他の3群の得点よりも有意に低かった。HH群では、謝罪なし－謝罪なし条件よりも謝罪あり－謝罪なし条件の得点が高く、これらの2つの条件よりも、謝罪なし－謝罪あり条件と謝罪あり－謝罪あり条件の得点が高いことが示された。

#### 4. 類似場面での行動予測に謝罪情報が及ぼす影響

再犯抑制得点、謝罪予測得点に関して、特性群(4: LL群、LH群、HL群、HH群)×謝罪情報(4: 謝罪なし－謝罪あり、謝罪なし－謝罪なし、謝罪あり－謝罪なし、謝罪あり

－謝罪あり)の2要因の分散分析を行ったところ、再犯抑制得点 ( $F(3, 270) = 319.96, p < .01$ )と謝罪予測得点ともに謝罪情報の主効果が有意であった。そこで、ボンフェローニ法による多重比較を行ったところ、再犯抑制得点に関しては、謝罪なし－謝罪なし条件、謝罪なし－謝罪あり条件、謝罪あり－謝罪なし条件、謝罪あり－謝罪あり条件の順で得点が有意に高かった。謝罪予測得点については、謝罪なし－謝罪なし条件よりも謝罪なし－謝罪あり条件と謝罪あり－謝罪なし条件の得点が有意に高く、これらの3つの条件よりも謝罪あり－謝罪あり条件の得点が有意に高いことが確認された。

#### 考察

本研究の目的は、実体信念と特性寛容性という被害者の2つのパーソナリティと、過去と現在の謝罪情報によって、加害者の謝罪についての認知が異なるかを明らかにすることであった。分析の結果、加害者の印象形成、怒り緩和、罪悪感、許容、再犯抑制と類似場面での謝罪の予測といったすべての謝罪効果について、謝罪情報との関連性が確認された。また、ポジティブ印象形成については、パーソナリティ要因との関連が見られ、実体信念が強い者であっても、特性寛容性が高ければ、加害者についてポジティブな印象を形成することが明らかになった。さらに、許容に関しては、パーソナリティ要因と謝罪情報との交互作用が見られ、実体信念の強弱によらず、特性寛容性の低い者

は、過去と現在の両方の違反場面で謝罪しない加害者よりも、どちらか一方でも謝罪した加害者を許す傾向にあること、過去の違反場面で謝罪した加害者については、現在の違反場面での謝罪情報に基づき、許容するか否かを判断することが示された。他方、実体信念が強くかつ特性寛容性も高い者は、現在の違反場面で謝罪すれば、過去に謝罪したかによらず許容する程度が高く、また、現在の違反場面で謝罪しない加害者を許容する程度は、過去の謝罪情報に規定されることが明らかになった。さらに、実体信念が低く特性寛容性が高い者は、現在も過去も一貫して謝罪しない加害者を許容する程度が最も低く、一度でも謝罪した加害者については、一貫して謝罪する加害者と同程度の許容がもたらされた。以上のことから、謝罪効果の程度には、過去と現在の謝罪情報による違いが見られるが、2つの謝罪情報の処理に実体信念や特性寛容性といったパーソナリティ要因が関連するのは、許容に関してのみであることが確認された。

#### 1) 加害者の謝罪の認知に被害者のパーソナリティ要因と謝罪情報が及ぼす影響

##### (1) 加害者の印象形成

2つのパーソナリティと謝罪情報が加害者の印象形成にいかに関与するかを検討したところ、加害者の印象を形成する際の謝罪情報の処理にパーソナリティ要因は関係しないが、2つの謝罪情報とパーソナリティ要因は、加害者の印象形成に別々に影響することが明らかになった。

まず、謝罪情報と加害者の特性評価との関連性については、現在の違反場面で謝罪しなかった者よりも謝罪した者の方がポジティブな印象が形成されやすいこと、また、同じように現在の違反場面で謝罪しなかった、もしくは謝罪した加害者であっても、過去の違反場面で謝罪しなかった加害者は謝罪した加害者に比べ、ポジティブな印象が形成されないことから、加害者についてポジティブな印象を形成する上で、情報処理の優先順位は、現在の謝罪情報に次いで過去の謝罪情報であることが示された。他方、ネガティブな印象が最も形成されやすいのは、過去と現在の両時制において謝罪しなかった者であり、反対に最も形成されにくいのは、両時制において謝罪した者であることが示された。時制間の謝罪情報に矛盾がある加害者について形成されるネガティブ印象はその中間にあり、現在の謝罪情報と過去の謝罪情報のいずれかの優先順位が高いわけではなかった。

加害者の印象形成が謝罪情報に基づき行われるという本研究結果は、芝崎・芝崎(2020)と概ね一致している。ネガティブ印象形成については、現在の謝罪情報と過去の謝罪情報の優先度に違いが見られないという結果が得られた。謝罪は違反というネガティブなイベントで生じるという性質上、加害者のネガティブな印象は払拭されにくく、したがって、矛盾した2つの謝罪情報が提示されたとき

に、過去と現在のどちらか一方の謝罪がネガティブ印象の改善に強く作用するわけではないことが示された。

一方、ポジティブ印象の形成に関しては、矛盾した2つの情報が示されたとき、それらの矛盾を解消するように説明づける<sup>10)</sup>のではなく、優先度の高い情報から、すなわち現在の謝罪情報を処理した後に過去の謝罪情報を処理した上で、形成の程度が決定されるといえる。また、ポジティブ印象についてのみ、パーソナリティ要因との関連性が確認され、実体信念が強い者に関しては、寛容性の低い者よりも高い者の方が、加害者に対してポジティブな印象を形成しやすいことが明らかになった。Berry, Wrothington, O'Connor, Parrott, & Wade<sup>12)</sup>によると、寛容性の高い者は、対人葛藤場面において他者との対決を避ける傾向にあり、友好的対処方略を選択するという。実体信念の強い者に関して、寛容性の高さがポジティブ印象の形成に影響するという本研究結果は、能力や特性は変わらず固定的であるという実体信念を強く持つ者であっても、高い寛容性を持ち合わせていれば、加害者と友好的な関係を構築したいという欲求から、加害者に対する印象改善を行いやすいことを示唆するものである。

##### (2) 怒り緩和、罪悪感予測、許容

怒り緩和と罪悪感予測に関しては、謝罪情報との関連性が見られた。まず、怒り緩和については、両時制において謝罪しなかった加害者に対する怒りが最も緩和されにくく、反対に、ともに謝罪した加害者への怒りが最も緩和された。その中間に位置する、過去と現在のいずれかにおいて謝罪した加害者については、怒り緩和の程度は変わらず、したがって、怒り緩和に関しては、どちらか一方の謝罪情報を優先的に処理するわけではないといえる。

罪悪感予測に関しては、謝罪情報の優先度は明確であり、現在の違反場面で謝罪した加害者は謝罪しない加害者よりも罪悪感をより認識していると判断されること、また、現在の違反場面で謝罪したあるいはしなかった加害者については、過去の謝罪情報が判断基準となり、過去に謝罪した加害者の方が、罪悪感をより認識していると判断された。罪悪感には、加害者が違反についての責任を認識しており、行動改善の意志を持つことを、被害者に伝達する役割がある<sup>13)</sup>。本研究結果は、こういった罪悪感のもつ伝達役割は、時制によらず一貫して謝罪する加害者において最も有効であり、過去と現在のいずれか一方の謝罪情報のみが有用なわけではないことを意味している。

他方、許容に関しては、謝罪情報の処理にパーソナリティ要因が影響することが明らかになった。実体信念が弱く、特性寛容性の高い者では、現在も過去も一貫して謝罪しない加害者を許容する程度が最も低く、一度でも謝罪した加害者については、一貫して謝罪する加害者と同程度の許容がもたらされた。特性寛容性の高い者とは、友好的な

対処方略を志向しがちで、加害者を許す傾向がある(Berryら, 2005)。こういったBerryら<sup>12)</sup>の見解は、実体信念が弱くかつ特性寛容性の高い者は、一度でも謝罪した加害者には一様に許容を与えるという本研究結果と合致する。しかしながら、特性寛容性が高くとも、実体信念も強い者は、現在謝罪した加害者については過去の謝罪の有無によらず一様に許容するが、過去に謝罪したとしても現在謝罪しない加害者への許容の程度はそれよりも低かった。実体信念の強い者は、一度失敗した他者について、努力アピールを受け入れず、再チャレンジの機会を与えない傾向がある<sup>7)</sup>。つまり、友好的方略を好み、加害者に寛大であろうとする寛容性の高さは、実体信念の強さによって緩和され、これまでの違反では謝罪してきたが現在の違反場面ですら一度謝罪しなかったという加害者の失敗を受容する程度を低下させたと推察される。

さらに、実体信念の強弱によらず、特性寛容性の低い者は、時制によらず一貫して謝罪しない者よりも、過去と現在のいずれかにおいて謝罪した者を許す傾向にあり、また、過去に謝罪した加害者を許容する程度は、現在の謝罪の有無によって異なることが示された。つまり、実体信念が弱く特性寛容性が高い者のように、一度でも謝罪した加害者に対して同程度の許容を与えるのではなく、過去の謝罪情報と現在の謝罪情報を1つ1つ吟味し、その組み合わせによって許容の程度を細かく決定しており、こういった傾向は、対人葛藤で友好的振る舞いを避ける<sup>12)</sup>、すなわち好戦的であろう寛容性の低い者において顕著であることが示された。

### (3) 再犯抑制と類似場面での謝罪についての予測

再犯抑制と謝罪予測についてはともに、パーソナリティ要因との関連性は確認されなかった。まず、再犯抑制に関しては、過去の謝罪情報の優先度が高く、過去において謝罪したあるいはしなかった加害者について、類似場面と同じ違反を犯すか否かを予測する際には現在の謝罪情報が用いられていた。ポジティブ印象形成や罪悪感予測とは異なり、過去の謝罪情報の優先度が高かったのは、現在の違反場面における一度の謝罪の有無ではなく、これまでの違反場面での加害者の行為が、次の違反を予測する上での有用な手がかりであると判断されることを意味しており、こういった予測は、実体信念や特性寛容性の高低に左右されないといえる。4条件ともに、過去も現在も加害者が同じ違反を繰り返しているという状況は共通している。つまり、実体信念や特性寛容性の高低によらず、過去において違反の度に謝罪してきた加害者は、同様の違反を抑制すると判断されるという本研究結果は、過去の違反における度重なる謝罪が、違反に対する責任を受容<sup>1)</sup>や社会的正当性の回復<sup>2)</sup>といった、その行為の持つメッセージの伝達に成功したことを意味している。

一方、謝罪予測に関しては、過去と現在の両時制において謝罪しない加害者の得点が最も低く、ともに謝罪した加害者の得点が最も高かった。過去と現在のいずれかにおいて謝罪した加害者が類似場面で謝罪すると予測される程度はその中間であり、過去と現在の謝罪情報のどちらかの優先順位が高いというわけではなかった。本研究結果から、こういった謝罪予測に、実体信念や特性寛容性は関係しておらず、したがって、「能力や特性は変わらず固定的である」といった信念<sup>6)</sup>が謝罪予測を規定するのではなく、むしろ、加害者の謝罪を予測する際には、加害者の謝罪情報に基づくことが示された。

### 2) 今後の課題

大淵ら<sup>8)</sup>によると、加害者が謝罪した場合、実体信念の強い人よりも弱い人の方が加害者を許容する程度が高いという。本研究では、特に許容に関して、実体信念と特性寛容性が相互に関連しながらいかに作用するかといった点について、許容に至るまでの意志決定プロセスの一端が、2つの謝罪情報の処理に基づき明らかにされた。結果として、2つの信念は、類似場面での謝罪予測とは関連しておらず、実体信念の強い者ほど過去の謝罪情報にとられるというわけでもなかった。

しかし、これらの結果から、「特性や能力は変わらない」といった実体信念の枠組みに謝罪行動は当てはまらないと結論づけることはできない。例えば、本研究で扱った、遊びの約束時間への遅刻は、人によっては違反としての深刻度が低かったかもしれない。謝罪研究の多くは対人葛藤場面を扱っていることから<sup>14)</sup>、違反ではなく対人葛藤に関する課題を用いることで、本研究とは異なる結果が見られる可能性がある。

また、対人葛藤は、親しい間柄で生じることも多く、被害者と加害者の親密度は謝罪生起に影響することが明らかにされている<sup>15)</sup>。両者の関係性なども考慮しながら、謝罪行動と実体信念との関連性について検討していきたい。

さらに、本研究は青年期女子のみを対象としたものであるが、青年期男子を対象とした場合、本研究と異なる結果が得られる可能性がある。性差については、今後の検討課題である。

### 文献

- 1) Darby, B. W., & Schlenker, B. R. 1982 Children's reactions to apologies. *Journal of Personality and Social Psychology*, 43, 742-753.
- 2) Ohbuchi, K., Kameda, M., & Agarie, N. 1989 Apology as aggression control: Its role in mediating appraisal of and response to harm. *Journal of Personality and Social Psychology*, 56, 219-227.
- 3) Darby, B. W., & Schlenker, B. R. 1989 Children's

- reactions to transgressions: Effects of the actor's apology, reputation and remorse. *British Journal of Social Psychology*, 28, 353-364.
- 4) Kim, P. H., Dirks, K. T., Cooper, C. D., & Ferrin, D. L. 2006 When more blame is better than less: The implications of internal vs. external attributions for the repair of trust after a competence- vs. integrity-based trust violation. *Organizational behavior and Human Decision Processes*, 99, 49-65.
  - 5) 芝崎美和・芝崎良典. (2020) . 被害者は加害者をいかに認知するか：2つの謝罪情報の処理に着目して. *新見公立大学紀要*, 41, 49-54.
  - 6) Dweck, C. S. (1986) . Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*, 41, 1040-1048.
  - 7) 今瀧夢・相田直樹・村本由紀子. (2018) . リーダーの暗黙理論がチーム差配に及ぼす影響：失敗した成員に対する評価に着目して. *社会心理学研究*, 33, 115-125.
  - 8) 大淵憲一・山本雄大・謝曉静. (2016) . 謝罪受容に対するパーソナリティ要因の検討：実体信念と寛容性の効果. *放送大学研究年報*, 34, 87-92.
  - 9) Brown, R. P. & Phillips, A. (2005) . Letting bygones be bygones : Further evidence for the validity of the Tendency to Forgive scale. *Personality and Individual Differences*, 38, 627-638.
  - 10) 笹屋里絵. (1997) . 表情および状況手掛りからの他者感情推測. *教育心理学研究*, 45, 312-319.
  - 11) Chiu, C-Y., Hong, Y-Y., & Dweck, C. S. (1997) . Lay dispositionism and implicit theories of personality. *Journal of Personality and Social Psychology*, 73, 19-30.
  - 12) Berry, J. W., Worthington, E. L. Jr., O'Connor, L. E., Parrott, L. III, & Wade, N. G. (2005) . Forgiveness, vengeful rumination, and affective traits. *Journal of Personality*, 73, 183-225.
  - 13) Lindsay-Hartz, J. 1984 Contrasting experiences of shame and guilt. *American Behavioral Scientist*, 27, 689-704.
  - 14) 中川美和・山崎晃. (2005) . 幼児の誠実な謝罪に他者感情推測が及ぼす影響. *発達心理学研究*, 16, 165-174.
  - 15) 中川美和・山崎晃. (2004) . 対人葛藤場面における幼児の謝罪行動と親密性の関連. *教育心理学研究*, 52, 159-169.